地域のニュース　2004年1月10日　毎日新聞　（第3種郵便物認可）

目白駅周辺地区整備推進協

自ら命守る街づくり

地図に防犯・防災情報

支える　東京ボランティア奮闘記　▷8◁

「この自動販売機は固定されていない。災害時は危険だ」「袋小路が多くてまるで迷路。消防車は入れないな」。学生たちが路地を歩きながら防犯、防災上の問題点をチェックする。

昨年12月、滋賀県立大の院生、学生と住民ら16人が豊島区目白周辺地域を4班に分かれて歩いた。目白駅周辺地区整備推進協議会（平林秀敏会長）による「まち歩きウォッチング」だ。学生は協議会に参加する柴田いづみ教授の下で学ぶ。1日目は住民が案内し、2日目は学生だけで回った。

同大環境計画学科4年の井上洋一さん（23）と3年の東尚史さん（20）は目白3丁目と目白通りの商店街を担当。1人が住宅地図に暗がりや軒が接して延焼しやすい家屋、消火器の設置場所などを記入し、もう1人が写真に収めた。

案内した地元の大栗喜和子さんは「暗くて夜は私も避けて通る道がある。街が抱える問題点や街の良さを知ってもらいたいので、協力できてうれしい」と喜ぶ。終了後、学生たちが調べた内容を黄色の付せんに書き、写真と一緒に地図に張ると、すぐに地図は情報で埋まった。

協議会は89年に設立。JR目白駅周辺や目白通り沿いの街づくりを進めるボランティア団体だ。駅前広場の樹木の増植やトイレの配置換えなどを提案し、実現させた。駅完成の記念イベントも主催するなど行政主体から脱却し、ハード、ソフトの両面から住民パワーで街づくりを進める。

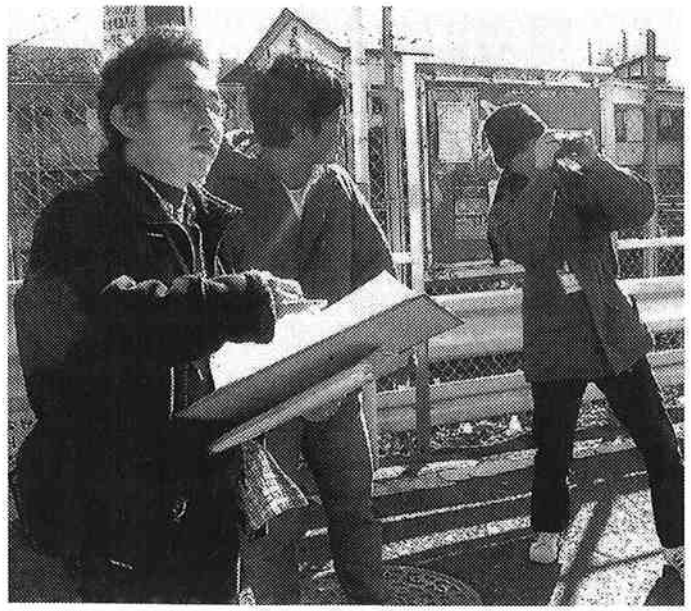
02年度からは防犯・防災に重点を置いた活動も始めた。都の地域危険度調査などで火災や建物倒壊の危険性が高いと判定され、空き巣やひったくりなど犯罪も増えているためだ。柴田幸正副会長（62）は「街づくりを考えていくと住民の命を守ることにたどり着く。災害時に一人でも犠牲者をなくすための街づくりを作りたい」と意欲的だ。

まず防犯・防災に関する住民アンケートと、インターネット上の掲示板「カキコまっぷ」の作成を始めた。

アンケートは昨年12月下旬から約6000世帯に配布した。行政の垣根を越え、生活圏が同じ目白通り沿いの新宿区下落合の住民にも配った。内容は「犯罪に地域でどんな対策を講じる必要があるか」「大地震発生時に一番不安に思うことは何か」など。現在、結果をまとめている。

掲示板は、防犯・防災上の課題や街の話題を自由に書き込んでもらう試みだ。学生たちが街で調べた内容も書き込んだが、「震災時すぐにわかるように消火栓の周囲が黄色のペンキで塗られている」など良い点に絞った。柴田教授は「情報を悪用されては困るので良い点だけ。掲載方法も検討課題」と話す。この活動は内閣府と国交省による「官民の協調による災害に強いまちづくりに関する検討調査」のモデル事業に選ばれた。

同協議会のワーキンググループ「目白街づくり倶楽部（くらぶ）」の柴田知彦代表（57）は「知恵を出し合って問題を解決していこうと、住民自身が動ける時代になった。『防災』を通し、自分たちが暮らす街はどういう街を目指すのか。魅力ある街づくりを地域で考えていきたい」と話している。【鈴木玲子】



目白地区周辺を歩き、防犯、防災上の課題などをチェックする学生ら